

パークリー『人知原理論』における抽象観念について

八 田 善 穂

パークリー¹⁾は『人知原理論』²⁾において抽象観念 (abstract idea) の存在を否定しているが、その際挙げられている例を見ると、彼がその存在を否定しようとした抽象観念にはいくつかの種類があることが分る。そこで彼が抽象観念の存在を否定したことの意味を明らかにするには、これらを分類して各々の性質を考えることが一つの方法であろう。

そこで以下この点から、パークリーが抽象観念の存在を否定したことの意味を考察したい。

(一)

パークリーの挙げる抽象観念の諸例は特に『人知原理論』序論の7節から9節にかけて提示されている。

(1) まずパークリーは、心が「事物の混合観念 (mixed idea) ないし複合観念 (compound idea) をその単純な組成部分に分解し、おのおのをそれだけ視て、残りを排除」³⁾ するような抽象作用を否定する (序論7節)。すなわち彼は、ある性質について、その性質と共にある特定の事物の複合観念を構成する他の諸性質を同時に考えずには、その性質について考えることができないという立場に立つ。いいかえれば、ある性質はある事物の組成部分としてのみ知覚され、あるいは考案されうることである。そこで彼は、ある事物から

〔註〕

1) George Berkeley (1685—1753)

2) “A Treatise concerning the Principles of Human Knowledge.” (1710, 第2版1734)

引用に当っては Everyman's Library 版を使用し (以下 “Principles” と略記する)、訳文は大槻春彦訳『人知原理論』(岩波文庫) によった (以下『原理論』と略記する)。

3) “Principles” p. 96, 『原理論』 p. 19

切り離された、その事物の色としての、たとえば赤という抽象観念は存在しないという。⁴⁾

かくてわれわれは、このようにある事物の一つの性質として知覚され、後にその事物を除いて考想された観念を、パークリーが批判しようとする抽象観念の、第一のタイプとして取り出すことができる。⁵⁾

たとえば、ある事物が四角くて赤くて動いているときの、赤いという性質が、それだけとして抽象されることはできないということである。

しかしこの限りでは、ここに生じる抽象観念は、知覚された事物から、心の抽象作用によって分離されたものにすぎないことが注意されねばならない。⁶⁾

(2) 次に、このようにして形成された抽象観念がさらに相互に比較され、最も抽象的な観念（「延長」、「色彩」等）が形成されるという（序論 8 節）。そしてこの観念は、「延長」についていえば、「線でも面でも立体でもなく、どんな形状も大きさももたなく、それらすべてから全く切り離された観念」⁷⁾であり、「色彩」についていえば、「赤・青・白・その他いかなる一定限の色彩でもない。」⁸⁾

ここに生じる第二のタイプの抽象観念は、第一のタイプに対して、まさに心によって作り出されたものである。⁹⁾「色」という観念は決してある事物から抽象されうるものではないからである。

かくてこの抽象観念の形成は、第一のタイプの抽象観念の形成を前提するものといえる。¹⁰⁾

4) cf. M. C. Beardsley, 'Berkeley on "Abstract Ideas"' in "Berkeley's Principles of Human Knowledge" ed. by G. W. Engel & G. Taylor, Wadsworth, 1968 p. 35

5) cf. *ibid.*

6) cf. *ibid.* pp. 34—35

7) "Principles" p. 96, 『原理論』 p. 19

8) 同上

9) cf. Beardsley 前掲論文 pp. 35—36

10) cf. *ibid.* p. 36

cf. I. C. Tipton "Berkeley" Methuen, 1974 p. 142

(3) 以上二つのタイプの抽象観念は単純観念に属するものであるが、次に挙げられるものは「人間」とか「人間性」のような複合観念である（序論9節）。この場合には各々の事物に共通に存在する諸性質が抽象され、他と比較され、そして別の新たな観念が形成される。

このとき、「色彩をもたない人間はない」¹¹⁾ので、「この観念には色彩が含まれる。」¹²⁾しかし、「色彩は白でも黒でもありえなく、また、いかなる特殊な色彩でもありえない。なぜなら、すべての人間が与かる一つの特殊な色彩はないからである。同様に、身長も含まれる。が、そのとき、身長は高い身長でも低い身長でもなく、さりとて中等程度の身長でもなく、これらすべてから抽象された或るものである。」¹³⁾

そしてこの新たな観念は、第二のタイプと同じく、心によって作り出されたものである。

ここではさらに、人間とそれ以外の生物との比較によって、動物の観念が形成される（序論9節）。このときも、動物の抽象観念の組成成分としての身体について見ると、「全動物に共通な姿態ないし形状がないから、特殊な姿態ないし形状を全くもたない身体であり、毛や羽や鱗などで被われてもいないし、さりとて裸でもない」¹⁴⁾ことになる。運動についても、「歩くのでも飛ぶのでも匍うのでもない」¹⁵⁾といわなければならない。

しかしパークリーは、「どんな手や眼を想像するにせよ、手や眼は或る特殊な恰好や色彩をもっていなければならない。同様に、私が心に形成する人間は白い人か黒い人か褐色の人か、真直な人か曲っている人か、高い人か低い人か中背の人か、それぞれのどれかでなければならない。」¹⁶⁾とし、上記のような抽象観念を想うことはできないとする。

11) “Principles” p. 97, 『原理論』 p. 20

12) 同上

13) 同上

14) 同上, 『原理論』 p. 21

15) 同上

16) 序論10節。“Principles” p. 98, 『原理論』 pp. 21—22

われわれは以上の三つを、パークリーがその存在を否定した抽象観念の類型とすることができよう。

ところで、このように類別してみると、彼の挙げた例が二つの種類から成ることが分る。

すなわち、上記の第一のタイプは複合観念を単純観念に分解するところから形成されるものであるのに対し、第二と第三のタイプは共に、単純観念および複合観念同志を比較して、共通なものだけを取り出すことにより形成されるものである。この限りで第二と第三のタイプはその性格を同じくするが、これらと第一のタイプとは明らかに異質である。そこでこれら二種の抽象観念の各々について、その存在が否定されることの意味を考えてみよう。

(二)

この点を考えるに当っては、二つのことが注意されるべきである。

その一つは、彼が抽象ということを全く否定してはいないことである。彼はいう。

「私は或る意味で抽象できることを認める。すなわち、或る特殊な部分ないし性質を他の部分ないし性質から分離して考えるときであるが、この場合には、これらの部分ないし性質は或る事物のなかで一つになっているとはいえ、しかも一方が他方を欠いても真に存在できるのである。」¹⁷⁾

「私は手や眼や鼻をそれぞれそれだけ、身体の残りの部分から抽象して、すなわち分離して、考えることができる。」¹⁸⁾

「真実に引き離して存在できる事物を、換言すれば、現実には引き離して知覚できる事物を、分離して思うだけに止まることが抽象と呼ばれてしかるべきであるとすれば、私は抽象できることを否定しないであろう。」¹⁹⁾

しかし一方、「分離して存在することが不可能であるような性質にあって

17) 同上、『原理論』P. 22

18) 同上、『原理論』p. 21

19) 本論 5 節。“Principles” P. 115, 『原理論』p. 46

1982年6月 八田善穂：パークリー『人知原理論』における抽象観念について

は、一つを他から抽象することの、すなわち分離して想うことの、可能性を私は否定する」²⁰⁾といわれる。

注意すべき点のもう一つは、彼が一般観念 (general idea) の存在は否定していないことである。一般観念とは、彼によれば、一つの観念が「それ自身に考えるとき特殊であるが、同じ種類の他のすべての観念を表示するように、換言すれば表わすように、させられる」²¹⁾ときに生ずるものである。

たとえば、線についてあることが幾何学的に論述される場合に、一つの特異な線が引かれるとしても、「この線はいかなる特殊な線をもすべて表示していて、そのため、この線について論証されることはすべての線について、別言すれば線一般について、論証される」²²⁾のであり、運動についてあることが示される場合には、「私がいかなる特殊な運動を考えるにせよ、速かろうと遅かろうと、垂直であれ水平であれ斜めであれ、また、いかなる事物の運動であれ、運動に関する上記の公理は等しく真である。」²³⁾ さらに延長についてならば、「延長が線であると面であると立体であるとを問わなく、大きさや形状がこうであるとかああであるとかを問わないのである。」²⁴⁾

このような場合の観念の一般性すなわち一般観念の存在は彼も認める。

しかし彼が一般観念の存在を認めるのは、そのことがたとえば延長についていえば、「線・面・立体のいずれでもなく、大きくも小さくもなく、黒・白・赤・その他いかなる一定限の色彩でもないような、延長の抽象一般観念を私が想わなければならないことにもならない」²⁵⁾からであり、要するに、一般観念は、それがあくまで具体的な知覚に基くものである限り、その存在が認められている。

20) 序論10節。“Principles” p.98, 『原理論』 p.22

21) 序論12節。“Principles” p.100, 『原理論』 p.26

22) 同上, “Principles” p.101

23) 序論11節。“Principles” p.100, 『原理論』 p.25

24) 同上

25) 同上

ここでパークリーが直接批判の対象としているのはロック²⁶⁾である。ロックは次のようにいう。

「三角形の一般概念を造るには……多少の労苦と熟練とが要求されはしないか。なぜなら、この観念は斜角三角形でも直角三角形でもあってはいけなく、等辺・等脚・不等辺のどれであってもいけなく、それらのすべてであると同時にどれでもないのだからなければならないのである。実をいえば、そうした観念は存在できない不完全なもので、いくつかの異なるかつ撞着した観念の諸部分が一つになっている観念である。」²⁷⁾

これに対してパークリーは、このような三角形の観念を形成することはできないとし、「私の考察する特殊な三角形は、その種類のいかんを問わず、いかなる直線三角形をもすべて等しく表わし表示し、その意味で普遍的である、と理解すべきである」²⁸⁾と主張する。

そして次のようにいう。

「論証しているあいだ私の視ている観念は、例えば辺の長さが一定限の二等辺直角三角形であるとはいえ、それにもかかわらず、私はたしかにこの論証を、いかなる種類や大きさであれ、すべての他の直線三角形へ及ぼすことができる。」²⁹⁾

「直角は斜角でもよかったし、辺は等しくなくともよかったのであり、それらすべてにかかわらず、論証は立派に行われたのである。そしてこの理由で私は、或る特殊な直角等脚三角形について真であることをいかなる斜角三角形ないし不等辺三角形についても真であると結論するのであり、三角形の抽象観念

26) John Locke (1632—1704)

27) “An Essay concerning Human Understanding” (1690) ed. by P. H. Nidditch, Oxford, 1979. (以下“Essay”と略記する) p. 596
大槻春彦訳『人間知性論』(岩波文庫)(以下『知性論』と略記する)(四) p. 132 (4巻7章9節) 参照。

この文章は、パークリー自身が引用している(『原理論』序論13節。“Principles” pp. 101—102, 『原理論』 p. 27)。訳文は『原理論』によった。

28) 序論15節。“Principles” p. 103, 『原理論』, p. 30

29) 序論16節。“Principles” p. 104, 『原理論』, pp. 30—31

について命題を論証したからではないのである。」³⁰⁾

確かに幾何学は、普遍観念を扱う。しかしこの場合にも、「幾何学の図に含まれる特殊な線や図形はさまざまな寸法の無数の他の線や図形を表わすと想定される。換言すれば、幾何学者は線や図形の大きさを捨象して、それら線や図形を考察するのである。が、これは、幾何学者が抽象観念を造ることを含意しない。ただ、幾何学者は大小いづれにせよ特殊な大きさというものを意に介さなく、大きさをもって論証に無関係なことと見る。そうしたことを含意するだけなのである。」³¹⁾

実際、ロック自身が認める通り、「斜角三角形でも直角三角形でもなく、等辺・等脚・不等辺のどれでもなく、それらのすべてであると同時にどれでもないような、三角形の観念」³²⁾は存在することができない。ある図形が三角形であるならば、それは必ず等辺であるか等脚であるか不等辺であるかのいずれかである。

しかしいづれかであるのは、三角形としてであり、「三角形であること」と、「それが等辺であるか等脚であるか不等辺であるか」ということとは切り離して考えることができるであろう。そしてこのとき「三角形であること」を先行させるならば、われわれは等辺・等脚・不等辺のいずれをも含むものとして、また特定のいずれかではないものとして、三角形の一般観念をもつことができよう。³³⁾ ただしこの場合には、「三角形という言葉の意義を制限する一つの定まった観念はない」³⁴⁾ことになる。

Mackie は、ロックの「それらのすべてであると同時にどれでもない」³⁵⁾という表現は困難さを強調するための不必要な誤りであり、ロックがいおうとし

30) 同上、『原理論』p. 31

31) 本論126節。“Principles” p. 179, 『原理論』pp. 148—149

32) 序論13節。“Principles” p. 102, 『原理論』p. 28 註27) 参照

33) cf. J. Bennett “Locke, Berkeley, Hume Central Themes” Oxford, 1971 p. 38

34) 序論18節。“Principles” p. 106, 『原理論』p. 34

35) 註27), 32) 参照

たのは、抽象観念はそれらのいずれにも同時に当てはまるということにすぎないとしている。³⁶⁾

パークリー自身、次のようにいう。

「図形を単に一つの三角形と考えて、角の特殊な性質や辺の關係に注意しないことは、可能である。そのかぎり、抽象はできる。」³⁷⁾ そしてこれについて次のようにいわれる。「が、これによって、三角形の抽象的一般的なかつ撞着する観念を形成できるとは、決して証明されないであろう。」³⁸⁾

図形と並んで問題になるのが数である。パークリーによれば、「算数学は数の抽象観念を対象とするとこれまで考えられてきた」³⁹⁾が、「数を示す名前や数字によって指表される抽象的な数観念はない」⁴⁰⁾とされる。「算数学では事物を眺めないで、記号を眺める」⁴¹⁾のであり、「数に関する抽象的真理や抽象的定理として通用する事柄は、真実には、個々特殊な、数えられる、事物と別個な事物に関与するのではなく、ただ単に名前や文字に関与するだけなのである。」⁴²⁾

以上のことから、パークリーのいう一般観念の性格はほぼ明らかである。すなわち彼の立場においては、あくまで「観念の存在は知覚されることに存する」⁴³⁾のであり、このことによる限り一般観念は存在しうる。逆にいえば、具体的な知覚を捨象した形での抽象一般観念の存在が否定されるわけである。⁴⁴⁾

彼においては観念は、「心的彫像・記憶像及至実在の心的模写から成り立っていることを、全然意味していない。正しくそれと逆に、彼は、それらが全体として、また部分からその構成分子に至るまで感知しうる実在であることを、

36) J. L. Mackie "Problems from Locke" Oxford 1976 p.116

37) 序論16節。"Principles" p.104, 『原理論』 p.31

38) 同上

39) 本論119節。"Principles" p.175, 『原理論』 p.141

40) 本論120節。"Principles" p.175, 『原理論』 p.142

41) 本論122節。"Principles" p.177, 『原理論』 p.144

42) 同上

43) 本論2節。"Principles" p.114, 『原理論』 p.44

44) 序論12節。"Principles" p.100, 『原理論』 p.26

1982年6月 八田善穂：パークリー『人知原理論』における抽象観念について
意味している。」⁴⁵⁾

たとえば、「あそこに人がいる」というときの「人」すなわち「人間」は、
一般観念であっても抽象一般観念ではない。

(三)

そこで以上のことから、先述の第二および第三のタイプの抽象観念について
は、その批判の向けられるところが既に明らかである。すなわち、パークリー
が批判の対象としたものは、具体的知覚を捨象した形での抽象観念の存在を無
造作に承認し、そこから事物に向かおうとする態度であり、このとき心によっ
て作り出され、しかもその存在が主張される抽象一般観念である。

逆にいえば、パークリーが第二および第三のタイプの抽象観念の存在を否定
することによって主張しようとしたものは、具体的知覚の尊重であり、具体的
思惟⁴⁶⁾であった。

たとえば「人間」について何事かを述べようとするならば、われわれはつね
にまず、誰か特定の具体的な人物から出発せねばならないというのが、彼の主
張の骨子といえよう。

彼はいう。

「およその世で最も平明な事物、我々が最も親しく熟知し完全に知るも
の、そうしたものも、抽象的に考えられるときは、奇妙に困難で了解できなく
見えるのである。」⁴⁷⁾

「一切の特殊な快から切り離された幸福の抽象観念や一切の善い事物から切
り離された善の抽象観念を形成すること、かようなことは、これをなすと称し
うる者の殆んどないことである。同様に、人間は正義や徳の精密な観念をも
たずとも正しいことができるし、有徳であることができるのである。こうした

45) 名越悦『パークリー研究』刀江書院 昭和40年 pp.192—193

46) cf. A.A. Luce “Berkeley’s Immaterialism” Russel 1968 (Reprint of 1945
edition) p. 30

47) 本論97節。“Principles” p.161, 『原理論』 p.118

言葉や似寄りの言葉が、あらゆる特殊な人物や行動から抽象された一般思念を表わすという説は、これまで道徳を難解にし、道徳の研鑽を人類にとって比較的無用にしてきたように思える。」⁴⁸⁾

「抽象思念を表わすとされる多数の解し難く曖昧な名辞が形而上学や道徳に導入され、そしてそれらの名辞から、学者間に限りない紛乱や論議が起ってきたのである。」⁴⁹⁾

「知覚することと知覚されることから、抽象された実有ないし存在の念を有すると称する者があれば、私は疑うが、それは純然たる背理であり、言葉の戯れなのである。」⁵⁰⁾

「抽象一般観念を形成する機能があると称する者は、恰もかような〔実質などの積極的〕観念を有するかのように語る。そしてこの観念は、その人々の言うところでは、あらゆる思念のうちで最も抽象的かつ一般的な思念である。すなわち、私にとってはあらゆる他の思念にまして最も了解できないものなのである。」⁵¹⁾

ところでロックは次のようにいう。

「もし私たちの取り入れる個々の観念がすべて個々の名まえをもつとしたら、名まえは限りなくなければならぬ。これを防ぐため、心は、個々の対象から受けとった個々の〔特殊な〕観念が一般的になるようにする。これはこれらの観念を、他のすべての存在や、時間とか場所とかのような実在するときの諸事情や、その他いっさいの同伴観念から切り離されて心に現われたものとして考察することによって行なわれる。これが抽象と呼ばれ、これによって、個々の存有者から取られた観念は、同種類のすべてのものの一般的代表となり、その名まえ、すなわち一般名が、そうした観念に合致して存在するどんなものにも当てはめられる。」⁵²⁾

48) 本論100節。“Principles” p. 163, 『原理論』 p. 121

49) 本論143節。“Principles” p. 188, 『原理論』 p. 163

50) 本論81節。“Principles” p. 153, 『原理論』 p. 105

51) 同上

52) “Essay” p. 159, 『知性論』(一) pp. 227—228 (2巻11章9節)

「これは人間で、あれは馬だ、これは正義で、あれは残忍だ、これは懐中時計で、あれはグラスだ、そう言うとき、私たちは事物をさまざまな違う種の名まえのもとに、そうした名まえを記号としておいた抽象観念に一致するとして類別する。そうしたことのほかになにをするか。」⁵³⁾

すなわちロックの立場は、「ことばは一般観念の記号とされることによって一般的となる」⁵⁴⁾という点に存する。

これに対してパークリーは次のように反論する。「言葉が一般的となるのは、或る一つの抽象一般観念の記号とさせられることによるのではなく、いくつかの特殊観念の記号とさせられ、かつ、それら特殊観念のどれをも無差別に心へ示唆することによるように思われるのである。」⁵⁵⁾

「一般的な名前はすべて多数の特殊観念を無差別に標示して、従って一般的な名前に添えられた一つの精密で限られた意義のようなものはないのである。」⁵⁶⁾

「知識の大部分は言葉の濫用によって、すなわち知識を陳述する一般的な話し方によって、奇妙な紛糾と昏迷とに陥し入れられてしまったのである。」⁵⁷⁾

Tipton の指摘にもある通り⁵⁸⁾、このパークリーの主張こそ、彼が抽象観念の存在を否定する出発点である。⁵⁹⁾ しかしこの批判は、「個別的具象的観念しか考えないパークリーが、観念と次元をことにする思念 (notion) ないし概念としての抽象一般観念を考えるロックを理解しなかったところから生じた」⁶⁰⁾といわれている。

53) “Essay” p. 415, 『知性論』(≡) p. 103 (3巻3章13節)

54) “Essay” pp. 410—411, 『知性論』(≡) p. 95 (3巻3章6節)。この文章は、パークリー自身が引用している(『原理論』序論11節。“Principles” p. 100, 『原理論』p. 24)。

55) 序論11節。“Principles” p. 100, 『原理論』pp. 24—25

56) 序論18節。“Principles” p. 106, 『原理論』pp. 33—34

57) 序論21節。“Principles” p. 109, 『原理論』p. 38

58) Tipton 前掲書 p. 141参照

59) 『知性論』(≡) p. 320 同書註10参照

60) 『知性論』(≡) p. 376 訳者解説

(四)

それでは第一のタイプについてはどうであろうか。

先に見た通り、パークリーの抽象に関する指摘のポイントは、分離して存在できる部分ないし性質については抽象を認め、分離して存在できない性質については抽象を認めないところにある。⁶¹⁾ そして第一のタイプの抽象観念は、彼によれば、分離して存在できない性質について形成されたものである。

では具体的にいって、どのような部分ないし性質が分離して存在することが可能であり、どのような性質が不可能なのであろうか。この区別をはっきりしない限り、彼が第一のタイプの抽象観念の存在を否定することの意味は明らかにならないように思われる。

まず彼は次のようにいう。

「事物の性質ないし様相はおのおのがそれぞれ別に、他のすべての性質や様相から分離されて、実在することは決してなく、いくつかが一つの事物のうちにいわば混合し、混じり合っている。」⁶²⁾

しかし彼はまた一方で、いくつかの観念が「相伴うと観察されるので、一つの名前で標印されるようになり、かくて一つの事物といわれるようになる」⁶³⁾ という。すなわち多様な諸観念は初め種々の感覚を通じて心に現われ、後にそれらが混じり合わされ組み合わせられて、一つの事物に統一されるという。たとえば、「或る色彩、味、香、形状、堅さは一つになっているとこれまで観察されてきたので、林檎という名前で標示される一つの別個な事物と考えられる。」⁶⁴⁾

この二つの、相反するとも思われる事柄はどのように解釈されるべきであろうか。ここでわれわれは、上の二つの指摘に関するそれぞれの例が質を異にし

61) 註17), 18), 19), 20) 参照

62) 序論 7 節。“Principles” p. 95, 『原理論』 p. 18

63) 本論 1 節。“Principles” p. 113, 『原理論』 p. 43

64) 同上

ていることに注意すべきであろう。すなわち、前者に関しては、前にも述べたように、延長と色彩と運動がその例として挙げられ、後者に関しては色彩、味、香、形状、堅さが挙げられている。これらの例が任意的なものでないとするれば、感覚の種類についていえば前者は視覚のみであるのに対して、後者は味覚、嗅覚、触覚を含んでいる。

さらに彼は、分離して存在できる性質として、バラの香りを挙げている。⁶⁵⁾

また分離して存在できるものについては、「部分ないし性質」⁶⁶⁾あるいは「事物」⁶⁷⁾という言葉を使うのに対し、分離して存在できないものは「性質」としかいわない。

以上の諸点からはほぼ明らかであるが、パークリーが分離して存在できない性質とっているものは視覚に関するものであり、他の諸感覚に関する性質、および事物の部分（胴体と手足、手と眼と鼻等）は、それぞれが分離して存在できるものとされているようである。

すなわち視覚によって知覚される性質は、色彩、延長、運動のように複数のものであるが、それらは決して別々に知覚されるのではなく、必ず同時に知覚されるものである。それゆえそれらは分離して存在することはない。

しかしそれらは、他の感覚によって知覚される性質とは、同時に知覚されるとは限らないところから、これらの他の感覚によって知覚される性質とは、分離して存在できるとされるのであろう。事物の部分に関しても同様であり、たとえば手だけが知覚されることが可能であるところから、それは身体の他の部分から抽象して考えることができる⁶⁸⁾とされるのであろう。パークリーにおいては、分離して存在できる（できない）ということは、分離して知覚されうる（されえない）ということの意味するからである。

このように考えるならば、結局パークリーが批判しようとした第一のタイプ

65) 本論5節。“Principles” p. 115, 『原理論』 p. 46

66) 序論10節。“Principles” p. 98, 『原理論』 p. 22

67) 本論5節。“Principles” p. 115, 『原理論』 p. 46

68) 序論10節。“Principles” p. 98, 『原理論』 p. 21

の抽象観念は、視覚によって知覚される性質に関するものだけであり、他の諸感覚によるものは含まれていないと見るべきである。

このことは彼自身の言葉によってそのように明言されているわけではない。しかし先に挙げた「事物の性質や様相は……分離されて、実在することは決してなく……」⁶⁹⁾という文章について見ても、「いくつかが」といわれていて、「すべてが」とはされていないことから、ほぼ明らかといえよう。

彼はロックの説く第一性質と第二性質の区別を否定し、両者は共に心にのみ存在するとして、「思惟の抽象によって物体の延長と運動を他の一切の可感的性質なしに想うことができるかどうか」⁷⁰⁾と問い、「延長を有して運動させられる物〔だけ〕の観念を形成することは私の力能になくて、心のうちにのみ存在すると承認される色彩その他の可感的性質を同時に附与しなければならない」⁷¹⁾とする。

彼が第一性質と第二性質は共に心にのみ存在すると考えるに到った事情については、次のように述べられている。

「まず初めには、色彩や形状や運動やその他の可感的性質ないし偶有性は心の外に実在すると考えられた。そしてこの理由で、或る思考しない基体ないし実体があって、色彩などはそのうちに存在する、と想定する必要があると思えた。けだし、色彩などは独りで存在すると想われることができなかつたからである。そのうち、時の経つにつれて、人々は、色彩や音やその他の可感的第二性質が心の外に存在しないことを承服したので、上記の基体すなわち物質的実体からそれら第二性質を剥ぎ取って、形状や運動などの第一性質だけを残した。それら第一性質を人々はなお心の外に存在すると想い、従って物質の支持が必要であると想ったのである。とはいえ、すでに明示しておいたように、これら第一性質すら、これを知覚する或る精神ないし心のうち以外にやしくも

69) 註62) 参照

70) 本論10節。“Principles” p. 118, 『原理論』 pp. 50—51

71) 同上, 『原理論』 p. 51

存在できるものはなに一つない。」⁷²⁾

彼は、「延長や形状や運動は、心のうちに存在する観念にすぎない」⁷³⁾、「硬軟、色彩、味、温暖、形状などの性質は一つに組合わされて、さまざまな食料や衣料を組成するが、そうした性質は、すでに明示されてあるように、これを知覚する心のうちのみ存在する」⁷⁴⁾という。しかしこれらは事物の存在を否定するものではない。

彼は、「私が自分の眼で見たり手で触れたりする事物が現に存在し実在すること、これを私はいささかも疑問としない」⁷⁵⁾、「私の見たり触れたり聞いたり或いはそのほかのなんらかの仕方でも想ったり理解したりするものはすべて、前と同じく安固であり、前と同じく実在する」⁷⁶⁾という。

要するにパークリーのいおうとすることは、「感官によって知覚される、思考しない、存在物は、知覚されることと別個な存在をもたなく、従って、〔みずから〕能動し思考する、可感的存在物を知覚する、非延長的で不可分な実体すなわち精神のほかにはいかなる実体のうちにも存在できない」⁷⁷⁾ということである。

ところで第一のタイプの抽象観念の存在を否定するということは、視覚という感覚による知覚を、それ自身具体的なものとして、それ以上そこから何かを抽象することを拒むということである。そしてこのように考えるならば、第一のタイプの抽象観念の存在の否定は、具体的知覚を尊重することとして、結局第二および第三のタイプに関するものと同じ根拠によるものといえる。

すなわちパークリーが抽象観念の存在を否定したことの意味は、二種の抽象観念の区別を越えて、具体的知覚および具体的思惟を提起することにあつたといえよう。

72) 本論73節。“Principles” pp. 149—150, 『原理論』 p. 99

73) 本論9節。“Principles” p. 117, 『原理論』 p. 50

74) 本論38節。“Principles” p. 131, 『原理論』 pp. 70—71

75) 本論35節。“Principles” p. 129, 『原理論』 p. 68

76) 本論34節。“Principles” p. 129, 『原理論』 p. 68

77) 本論91節。“Principles” p. 159, 『原理論』 p. 114

抽象観念の存在を否定することは、それらを形成するような心のはたらきを否定することであり、逆にいえば、このとき心のはたらきとして認められるものが、具体的知覚に基く思惟である。

名越氏によれば、パークリーの第一の関心事は客観的対象存在にあり、「客観性が『原理論』の主眼点であった。」⁷⁸⁾また、「彼は独我論者でもなければ、主観主義者でも、主観的観念論者でもない。彼の出発点はデカルトの如く、自我ではなくて、『それ』(it)であり、『それ』の存在であった。」⁷⁹⁾

さらに Luce はこのことを、「デカルトは cogito, ergo sum をもって始め、パークリーは cogitatur, ergo est (それは思惟される。ゆえにそれは存在する) をもって始める」⁸⁰⁾といている。

このようにパークリーは、「哲学の諸派に……疑わしく不確実なところや不合理で矛盾したところを導き入れてきた原理がなんであるかを発見できるかどうか、試みて見ること」⁸¹⁾を目的とし、「思索を錯綜させ紛糾させるに主役を演じてきたように見えるもの」⁸²⁾を明らかにしようとした。そして抽象観念の批判を通じて具体的思惟の提起に至った。これは270年も前のことである。しかし、デカルトのコギトと同様に、このことの意義は今日もお失われてはいないように思われる。

78) 名越前掲書 p. 199

79) 同書pp. 199—200

80) Luce 前掲書 pp. 46—47

81) 序論4節。“Principles” p. 94, 『原理論』p. 17

82) 序論6節。“Principles” p. 95, 『原理論』p. 18